

子どもの心理療法における物理的環境の設定

—大学院附属相談室の実態をふまえた検討—

酒井麻紀子¹⁾ 横山佳奈²⁾ 吉田翔子²⁾
井手しほり³⁾ 永田雅子³⁾

問題

心理療法における物理的環境

心理療法のプロセスやその効果は、心理療法が行われる環境から多少なりとも影響を受けると考えられる。心理療法が行われる環境に関する観点は、外面的（物理的）構造と内面的（心理的）構造に大別される（前田, 1981；田畑, 2010）。前者は、治療場面の物理的設定や治療者－クライエントの空間配置などがあげられ、後者には、治療契約や面接のルールなどがあげられる。これまでの先行研究においては、内面的（心理的）構造に関する報告は数多くみられる一方で、白川・津川・羽生（2016）や三輪・羽生・飯長（2002）が指摘するように、物理的構造について検討された研究は、非常に少ないのが現状である。

心理面接における物理的構造を扱った数少ない研究のうちのひとつとして、森田・佐々木・坪井（2004）は、大学附属相談室の建物の移転に伴う物理的環境の変化が、相談活動に及ぼす影響を検討している。その結果、面接室の場所や空間、玩具といった物理的環境の変化がクライエントに影響を及ぼし、面接に何らかの揺れや変化を与えたと示唆されるようなケースが多く報告されている。加えて、小林・永田・松本・小松（2012）は、面接室の空間イメージと物理的要因の関連を検討している。その結果、部屋の広さや窓の有無、床や壁の色などが、面接室のイメージに関連していることが示唆された。これらの結果は、面接室の構造や調度品といった物理的環境が、クライエントや面接プロセスに影響を及ぼすこと

を示唆しているといえる。

子どもの心理療法における物理的環境とその設定

本研究では、とりわけ子どもの心理療法における物理的環境に着目する。成人のような言語面接が難しい子どもの心理療法においては、遊びを介した関わりを基盤とした面接として、プレイセラピーが選択されることが多い。アクスライン（Axline, 1947 小林訳 1970）によれば、プレイセラピーで使用される遊具は子どもの表現の媒体であると位置づけられる。したがって、どのような玩具を準備するのかは、面接の展開に影響する一つの大きな要因であるといえよう。加えて、ゲリー・L・ランドレス（Landreth, 2002 山中監訳 2007）は、プレイルーム（Play Room：以下、PR）の物理的構造として、内壁やドアに窓がなくプライバシーが守られた空間であることや、子どもが主導権を持って遊ぶのに十分な広さがあることなどをあげており、玩具だけではなく、部屋の構造全体を含めた物理的環境を考慮する必要があるといえる。

さらに、面接における備品や部屋の構造への配慮は、プレイセラピーのみならず、言語を主とした子どもの面接の場合でも重要と考えられる。例えば、神田橋（1984）は、緊張の高い精神科の患者に対しては、90度の位置関係で座れるような面接室のセッティングを提案している。これは、クライエントの状態に合わせた物理的環境設定の一例といえよう。また、Winnicott（1971）は、『遊ぶこと』で創造的に自己の探求が行われ、クライエントと「遊ぶ」ために、「遊べるようにする何かがまず必要」と述べており、非言語的なやりとりである「遊び」の要素は、単にプレイセラピーだけではなく、心理療法全般に応用できるものと考えられる。中でも、子どもから成人への移行期ともいえる思春期・青年期の心理面接では、ボードゲームなどの媒介物を用いた非言語的やりとりも織り交ぜながら、面接が進行されることも少なくないだろう。

以上のことから、子どもの心理療法において、物理的

- 1) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程（後期課程）（指導教員：松本真理子教授）
- 2) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程（後期課程）（指導教員：永田雅子教授）
- 3) 名古屋大学心の発達支援研究実践センター

環境が及ぼす影響は大きいことが推測されるものの、子どもの心理療法における物理的環境に関する研究は数少ないのが現状である。そこで本研究は心理療法における物理的環境について、とりわけ子どもの心理療法に焦点をあてて検討を行う。

子どもの心理療法における物理的環境に関する研究として、丸山・永田（2014）があげられる。ここでは、臨床心理士養成課程を有する大学院の附属相談室を対象として、プレイルームの設備や重視している物理的環境について調査を行った。その結果、プレイルームの物理的環境として考慮している点として、「心地よい雰囲気」があること、年齢や対象によって部屋が使い分けられるような「機能の分担」ができること、「安全性」などが見出された。

しかし、丸山・永田（2014）の報告は、プレイルームのみを対象としており、面接室を用いた子どもの心理療法の物理的環境については検討されていない。加えて、各相談室の代表者の回答に基づいていることから、相談室ごとの物理的環境についてはまとめられてはいるものの、個々のケースやセラピストの視点に基づいた検討はされていない。平木（1997）は、面接が始まる以前、すなわちクライアントとセラピストが出会うまでの期間を、「面接の助走、あるいは序奏とも呼ばれるような段階」と位置づけ、セラピストはこの段階からすでに面接への影響を考慮する必要があるとしている。関連して保坂（2001）は、面接に至る前にセラピストが行う「面接室の設定」も、面接構造の構築に関わるプロセスの一部として取り上げている。ここでいう面接室の設定とは、「クライアントとどこで会うかを選択すること」を意味する。保坂（2001）は、面接前にどの部屋を選択するかには、どのような面接を行うかという判断も含まれるとし、その具体例の一つとして、「思春期の子どもに会う時にプレイルームで会うのか面接室で会うのかによって、遊戯療法かカウンセリングかという選択を行うことになる」と述べている。このように保坂（2001）は、部屋の選択によって、その後の面接の大きな枠組みが決定されてしまうことが多いことを述べた上で、「所属する機関にある与えられた面接室を複数のカウンセラーと一緒に使用している場合、面接室の心理的な影響について残念ながらあまり考慮されていない現状にある」との指摘をしている。

以上をふまえて、本研究では、子どもの心理療法の物理的環境について、ケースごとに回答を求め、どのような経緯で部屋の選択が行われているのか、さらにはセラピストが各部屋の特徴をどのように捉えているのか、その実態を調査する。なお本研究では、18歳未満のク

ライアントを対象とした心理面接を、子どもの心理療法として位置付ける。

本研究で対象とする各部屋の概要

本研究では、大学院の附属相談室であり、公認心理師および臨床心理士の養成のための実習機関でもある名古屋大学心の発達支援研究実践センター心理発達相談室（以下、相談室）を対象に検討を行う。この相談室は、東海地域の大学附属相談室の中では、中規模の相談室であり、現在3つのプレイルーム（部屋A, B, C）と、6つの面接室（部屋D, E, F, G, H, I）が備えられている。以下では、各部屋の概要や主な特徴について示す。なお、3つのプレイルーム（部屋A, B, C）と2つの面接室（部屋D, E）においては、各部屋の見取り図をFigure 1-5に、室内にある設備や玩具の一覧をTable 1に示す。

部屋Aは、39m²の広さである。2畳ほどのマットが敷かれたスペースに大きなクッションが2つと、丸テーブルおよび椅子4脚が常設されている（Figure 1）。玩具は常設されておらず、室内の鍵のついた棚に収納されている。ケースに応じて、棚を閉じて玩具が見えない状態にしたり、反対に棚を開放しておもちゃを自由に使用したり、あるいはセラピストが事前に設置したりできる仕組みとなっている。棚には、箱庭や卓球台、バスケットボールのように大きな設備から、おもまごとセット、ボードゲーム、編み物セットなどの玩具などが収納されている。

部屋Bは、42m²であり、最も面積が広い部屋である。室内には、砂場や水場、大型のトランポリンが常設されている。部屋に用意されているおもちゃは、砂場用のものや三輪車、起き上がりこぼしなど、身体を用いて遊べるものが常設されている。加えて、ボールやバット、バドミントン、プラレールや戦隊モノの玩具など、多くの玩具が棚に設置されている。また、中扉を通じて、生け垣で囲われた中庭に出ることもできる（Figure 2）。

部屋Cは、27m²であり、部屋A, Bと比較すると面積は最も狭い。小型のトランポリンや箱庭、すべり台などが常設されている。ぬいぐるみやおもまごとセットなどのおもちゃが充実しており、それらの玩具は常設されている。部屋の空間が棚によって仕切られており、仕切られた場所にはソファが設置されている（Figure 3）。

部屋Dは、15m²であり、低めの机、一人掛けのソファが2つ、2人掛けのソファが設置された面接室である。部屋の奥には箱庭が常設されている。また、スケッチブックや粘土、ボードゲームなどが用意された扉付きの棚が設置されている（Figure 4）。

部屋Eは、17m²であり、高めの机と椅子4脚が設置された面接室である。部屋の奥の棚には、スケッチブック、

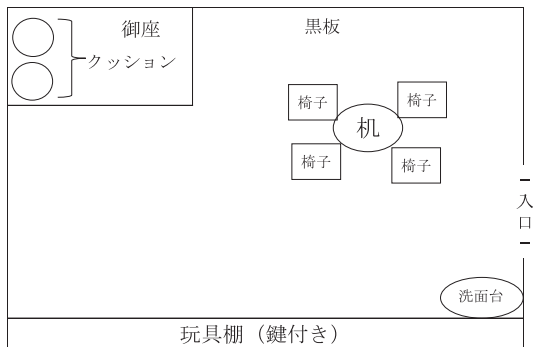


Figure 1. 部屋 A の見取り図

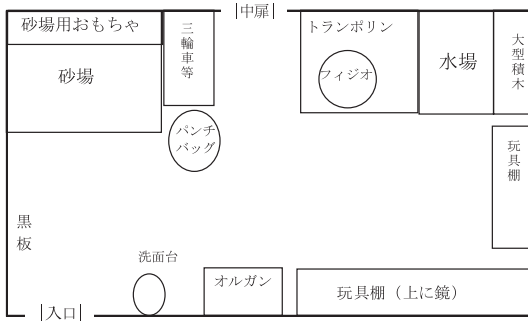


Figure 2. 部屋 B の見取り図

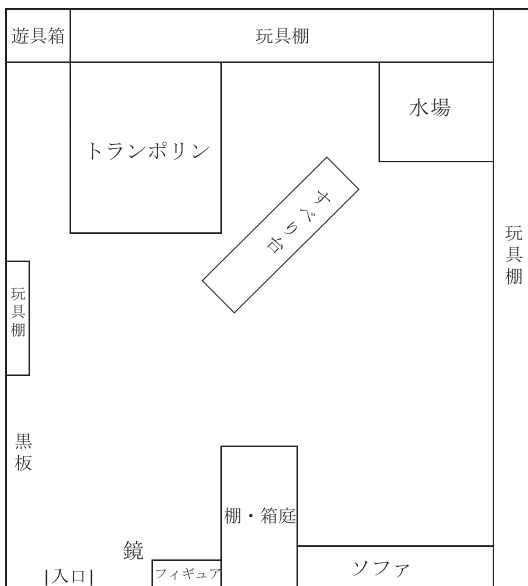


Figure 3. 部屋 C の見取り図

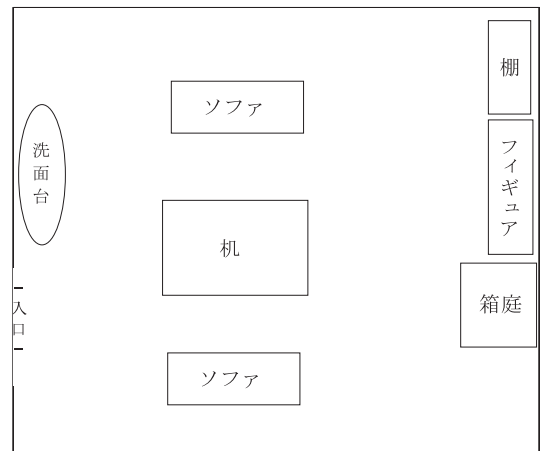


Figure 4. 部屋 D の見取り図

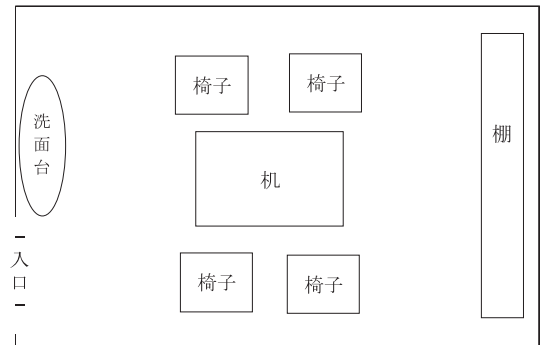


Figure 5. 部屋 E の見取り図

ボードゲーム、粘土などが用意された扉付きの棚が設置されている (Figure 5)。

その他、部屋 F は 10m², G は 16m², H は 10m², I は 9m² の広さの面接室である。いずれもテーブルに椅子またはソファが設置されている。箱庭やボードゲーム、スケッチブックなどの常設はなく、必要であればセラピストが持ち込んで使用する。

以上の部屋をその特徴ごとにまとめると、プレイルームは、玩具が常設されていないプレイルーム (以下、玩具非常設 PR; 部屋 A), 玩具が常設され、面積が比較的大きいプレイルーム (以下、玩具常設 PR 大; 部屋 B), 玩具が常設され、面積が比較的小さいプレイルーム (以下、玩具常設 PR 小; 部屋 C) の 3 つに分けられる。面接室は、室内に玩具のある面接室 (以下、玩具有面接室; 部屋 D・E), 室内に玩具の無い面接室 (以下、玩具無面接室; 部屋 F・G・H・I) の 2 つに分けられる。

以上の部屋のうち、部屋 A と H は、2019 年にこれまで

Table 1 部屋 A, B, C, D, E の設備・玩具

	プレイルーム			面接室	
	A (玩具非常設PR)	B (玩具常設PR大)	C (玩具常設PR小)	D	E
机	○	×	×	○	○
椅子・ソファ	○	×	×	○	○
洗面台	○	○	×	○	○
水場	×	○	○	×	×
黒板	○	○	○	×	×
砂場	×	○	×	×	×
鏡	×	○	○	×	×
箱庭	○*	×	○	○	×
すべり台	×	×	○	×	×
トランポリン	×	○	○	×	×
パンチバッグ	×	○	×	×	×
フィジオ	○*	○	○	×	×
バスケットボール	○*	×	×	×	×
卓球	○*	×	×	×	×
ダーツ	×	○	○	×	×
ソフトブロック	×	○	○	×	×
三輪車	×	○	×	×	×
ロディ	○*	○	○	×	×
プラレール	×	○	○	×	×
レゴ	×	○	○	×	×
おもまごとセット	○*	○	○	×	×
ぬいぐるみ・人形	○*	○	○	×	×
カードゲーム類	○*	○	○	○*	○*
ボードゲーム類	○*	○	○	○*	○*
お絵描き・粘土	○*	○	○	○*	○*
ビーズ・編み物	○*	○	○	×	×

注) 「○」はその玩具および設備が備えられていること、
「×」は備えられていないことを示す。

*は扉付き棚内に収納されており、出し入れできることを示す。

使用していた部屋の一部を改修して新たに増設された部屋である。本研究は増設後1年間の期間に開始された18歳未満の新規ケースおよび、改修により、部屋を変更する必要が生じた18歳未満のケースを対象として検討を行った。

本研究の目的

本研究では、公認心理師および臨床心理士を養成する大学院の附属相談室における18歳未満のクライアントを対象としたケースに着目し、各部屋の使用状況の実態や、部屋の選択状況、セラピストが感じる部屋の利点と限界点について検討を行う。本研究は、子どもの心理療

法における物理的環境を考える上での一つの資料を提供できると考えられる。

方法

調査協力者

相談室にて、調査時に相談室スタッフとして面接を担当している博士課程前期・後期の大学院生37名を調査対象とした。そのうち、36名が調査に参加した(回収率97%)。調査には、オンライン調査サービスQualtricsを使用した。

調査時期・調査対象期間

本調査は、2020年1月に実施された。調査対象となるケースは、18歳未満のクライアントのケースのうち、プレイルーム増設後の2019年2月から、調査が実施された2020年1月までの期間（以下、調査対象期間）に受理面接をした新規ケース（以下、新規ケース）および、同期間に部屋を変更したケース（以下、部屋変更ケース）であった。

調査内容

セラピスト（調査協力者）の属性 セラピスト（調査協力者）の学年と性別、調査対象期間内の18歳未満の新規ケース担当の有無、部屋を変更した18歳未満のケース担当の有無について回答を求めた。

18歳未満の新規ケースについて 調査対象期間に受理面接をした18歳未満の新規ケースについて、以下の質問に回答を求めた。

1. 調査対象期間に受理面接をした18歳未満の新規ケースの担当数
2. ケースの概要：クライアントの年齢、性別、主訴について回答を求めた。主訴については、「発達障害、精神発達遅滞、親子関係、不登校・登園しぶり、神経性習癖（抜毛など）、集団適応・友人関係、緘黙、思春期・アイデンティティ、統合失調症、外傷後ストレス障害、不安神経症、うつ病、強迫性障害、摂食障害、その他」から選択式で回答を求めた。
3. 使用した部屋：ケースでどの部屋を使用したかを選択式で回答を求めた。
4. その部屋を選択した経緯：その部屋を選択した経緯について「セラピストの選択・クライアントの希望・その部屋以外空いていなかった・その他」の4つより選択式で回答を求めた。
5. 4.の質問にて、セラピストの選択またはクライアントの希望と答えた場合のみ、その理由について自由記述で回答を求めた。
6. その部屋を使用してみて感じた利点（メリット）と限界点（デメリット）について、それぞれ自由記述で回答を求めた。

18歳未満の部屋変更ケースについて 調査対象期間に部屋の変更が生じた18歳未満のケースについて、以下の質問に回答を求めた。

1. 調査対象期間内に部屋を変更した18歳未満のケースの担当数
2. ケースの概要：クライアントの年齢、性別、主訴について、新規ケースと同様に回答を求めた。
3. 変更前に使用していた部屋：変更前にどの部屋を使

用していたかについて、選択式で回答を求めた。

4. 変更後に使用した部屋：変更後にどの部屋を使用したかについて、選択式で回答を求めた。
5. 変更後の部屋を選択した経緯：その部屋を選択した経緯について「セラピストの選択・クライアントの希望・その部屋以外空いていなかった・その他」の4つより選択式で回答を求めた。
6. 5.の質問にて、セラピストの選択またはクライアントの希望と答えた場合のみ、その理由について自由記述で回答を求めた。
7. 変更後の部屋を使用してみて感じた利点（メリット）と限界点（デメリット）について、それぞれ自由記述で回答を求めた。

倫理的配慮

調査実施にあたり、調査趣旨、匿名性の確保、協力者の中断の自由、個人情報の保護とデータの管理について説明を行い、同意した者のデータのみを分析に使用した。本研究は名古屋大学大学院教育発達科学研究科研究倫理委員会の承認を受けている（19-1380）。

結果

セラピスト（調査協力者）の概要

対象者36名から回答を得た（回収率97%）。学年の内訳は、博士課程前期課程の1年生13名、2年生12名、博士課程後期課程の1年生5名、2年生3名、3年生3名であった。性別の内訳は、男性9名、女性27名であった。回答時に調査対象となる新規ケースを担当していた者は27名、変更ケースを担当していた者は4名であった。

ケースの概要

新規ケース 本調査で得られた回答のうち、新規ケースは45件であった。クライアントの平均年齢は10.4歳（ $SD = 4.2$ ）、男性27名、女性18名であった。主訴の内訳は、「不登校・登園しぶり」12件、「緘黙」3件、「親子関係」2件、「集団適応・友人関係」7件、「発達障害」10件、「不安神経症」1件、「統合失調症」1件、「その他」9件であった。

部屋変更ケース 本調査で得られた回答のうち、部屋を変更したケースは5件であった。クライアントの平均年齢は13.8歳（ $SD = 3.7$ ）、男性2名、女性3名であった。主訴の内訳は、「親子関係」3件、「集団適応・友人関係」1件、「統合失調症」1件であった。

新規ケースにおける各部屋の使用状況

各部屋を選択した経緯 新規ケース45件のうち、各

部屋を選択した理由の内訳は、「セラピストの選択」27件、「クライアントの希望」1件、「その他」2件、「その部屋以外すべて空いていなかった」15件であった。

年齢層ごとの部屋の使用状況 新規ケースにおける各部屋の年齢層ごとの使用数を Table 2, Figure 6 に示した。その結果、本調査で回答された新規ケースのうち、部屋 B は 5 件の使用のうち 3 件が 1-6 歳のクライアントに使用されていた。部屋 C は 13 件の使用のうち 9 件が 7-12 歳のクライアントに使用されていた。面接室 (部屋 D, E, F, G, H)

は 13-18 歳のクライアントにのみ使用されていた。また、部屋 A は 14 件の使用のうち、1-6 歳のクライアントが 3 件、7-12 歳のクライアントが 6 件、13-18 歳のクライアントが 5 件であった。しかし、1-6 歳の 3 件は全て「その部屋以外空いていなかった」という理由で選択されており、部屋の空き状況の影響を受けていることから、積極的に選択されているわけではなかった。

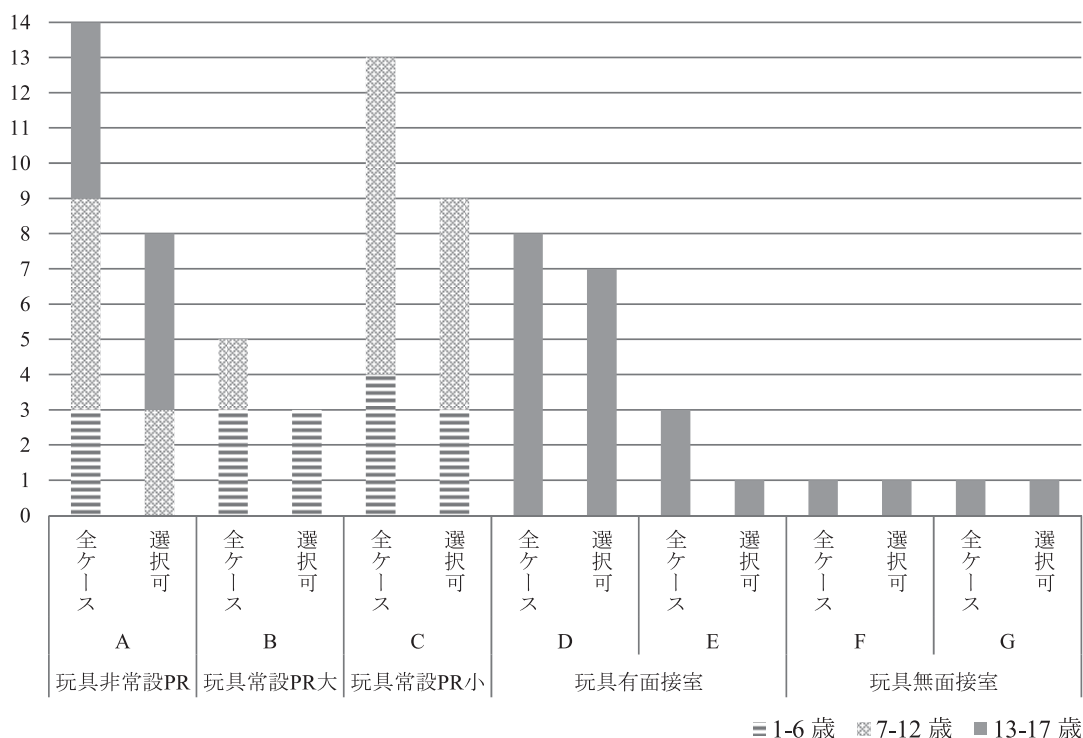
性別ごとの部屋の使用状況 新規ケースにおける各部屋の性別ごとの内訳を Table 3 に示した。新規ケースに

Table 2 新規ケースにおける年齢層ごとの部屋の使用状況

	玩具非常設 PR	玩具常設 PR大	玩具常設 PR小	玩具有面接室		玩具無面接室		合計
	A	B	C	D	E	F	G	
1-6 歳	3 (0)	3 (3)	4 (3)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	10 (6)
7-12 歳	6 (3)	2 (0)	9 (6)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	17 (9)
13-17 歳	5 (5)	0 (0)	0 (0)	8 (7)	3 (1)	1 (1)	1 (1)	18 (15)
合計	14 (8)	5 (3)	13 (10)	8 (7)	3 (1)	1 (1)	1 (1)	45 (30)

注) 括弧内は部屋の選択理由のうち「その部屋以外空いていなかった」という回答を除いた数。

部屋 H, 1 の使用はみられなかった。



注) 「全ケース」は新規ケース全てを母数とした値、「選択可」は「全ケース」から部屋の選択理由として「その部屋以外空いていなかった」という回答を除いた値。

Figure 6. 新規ケースにおける各部屋の使用年齢層

において、性別の違いによる各部屋の使用に目立った偏りは認められなかった。

主訴ごとの部屋の使用状況 新規ケースにおける各部屋の主訴ごとの内訳をTable 4に示した。新規ケースにおいて、主訴の違いによる各部屋の使用に目立った偏りは認められなかった。

部屋を選択する際の理由 新規ケースにおいて、その部屋を選択した経緯が「セラピストの選択」であった場合、セラピストがその部屋を選択した理由を示す自由記述について分析を行った。得られた記述は28件であった。これらの記述を、臨床心理学を専攻する大学院生3名がKJ法に準じた方法で分析を行ったところ、7つのカテゴリが見出された。得られたカテゴリとその度数、記述の具体例をTable 5に示した。その結果、選択理由は「玩具・設備」、「自由度の高さ」、「部屋の大きさ」の順に多くあげられた。

なお、部屋を選択した経緯のうち「クライアントの希望」によるものは1件のみであり、クライアントがその部屋を選択した理由についての自由記述には「ここがいい!」と言っていたので恐らく部屋の雰囲気が良かったのだと思います」と記されていた。

各部屋を使用してセラピストが感じた利点・限界点

以下では、各部屋を使用してセラピストが感じた利点と限界点について分析を行った。なお、各部屋を使用してセラピストが感じた利点と限界点に関しては、対象が新規ケースであるのか、部屋変更ケースであるかの違いは大きく影響しないと判断されたため、両者をまとめて分析を行った。

各部屋の利点(メリット) 新規ケースと部屋変更ケースにおいて、各部屋を利用してセラピストが感じた利点(メリット)の記述は50件であった。これらの記述を、臨床心理学を専攻する大学院生3名がKJ法に準じた方法で分析を行ったところ、5つの大カテゴリと4つの小カテゴリが見出された。得られたカテゴリとその度数、記述の具体例をTable 6に示した。

次に、部屋のタイプごとの利点について検討を行った。玩具非常設PR(部屋A)、玩具常設PR大(部屋B)、玩具常設PR小(部屋C)、玩具有面接室(部屋D・E)玩具無面接室(部屋F・G・H)の5つの5つの部屋タイプと、利点のカテゴリのクロス集計表をTable 7に示した。

部屋のタイプごとに利点をみていくと、玩具非常設PR(部屋A)の利点には、「自由度の高さ」が主にあげられた。玩具常設PR大(部屋B)の利点には、「部屋の大きさ」のうちの「広い」ことが主にあげられた。玩具

Table 3 新規ケースにおけるクライアントの性別ごとの部屋の使用状況

	玩具非常設PR	玩具常設PR大	玩具常設PR小	玩具有面接室		玩具無面接室		合計
	A	B	C	D	E	F	G	
男性	8 (5)	3 (1)	8 (6)	3 (2)	3 (1)	1 (1)	1 (1)	27 (17)
女性	6 (3)	2 (2)	5 (3)	5 (5)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	18 (13)

注) 括弧内は部屋の選択理由のうち「その部屋以外空いていなかった」という回答を除いた数。
部屋H, Iの使用はみられなかった。

Table 4 新規ケースにおける主訴ごとの部屋の使用状況

		主訴							
		不登校・登園しづり	緘黙	親子関係	集団適応・友人関係	発達障害	不安神経症	統合失調症	その他
玩具非常設PR	A	4(4)	0(0)	0(0)	3(2)	4(2)	0(0)	0(0)	3(0)
玩具常設PR大	B	1(0)	1(1)	1(1)	1(0)	1(1)	0(0)	0(0)	0(0)
玩具常設PR小	C	2(1)	1(0)	1(1)	2(2)	5(3)	0(0)	0(0)	2(2)
玩具有面接室	D	3(3)	0(0)	0(0)	1(1)	0(0)	1(1)	1(1)	2(1)
	E	0(0)	1(1)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	2(0)
玩具無面接室	F	1(1)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
	G	1(1)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
合計		12(10)	3(2)	2(2)	7(5)	10(6)	1(1)	1(1)	9(3)

注) 括弧内は部屋の選択理由のうち「その部屋以外空いていなかった」という回答を除いた数。

部屋H, Iの使用はみられなかった。

子どもの心理療法における物理的環境の設定

Table 5 セラピストが部屋を選択した場合の選択理由

カテゴリ	具体例
玩具・設備 (8)	「砂場やトランポリン等、活動できる部屋が適切と考えたため」 「箱庭や絵を描くものがあったから」
自由度の高さ (7)	「言語面接の枠組みの中でゲームや箱庭も選択できる」 「言語面かプレイか悩みどちらでも利用可能であったため」
部屋の大きさ (4)	「年齢が小さいので、あまり大きな部屋だと刺激が大きすぎるのではないかということ」
安全性 (2)	「低年齢もあり、安全に遊べる空間として選択した」
雰囲気 (2)	「9歳の女の子なら落ち着いた雰囲気のプレイルームの方が良いと思ったから」
言語面接の選択 (2)	「言語能力に問題が見られず、言語的なやりとりを通した問題解決および内省が可能と判断したから」
その他 (3)	「子どもだから」

注) 括弧内は度数。

Table 6 部屋の利点（メリット）のカテゴリ

大カテゴリ	小カテゴリ	具体例
部屋の大きさ(9)	狭い (4)	「比較的小さい部屋なので、落ち着いてプレイをすることができる」
	広い(5)	「広さを生かした遊びができる」
玩具・設備(23)	距離感の調整(6)	「机が高いため、セラピストとクライアントの間に程よい距離ができる」
	その部屋特有の設備(17)	「箱庭が使用できたこと」「椅子がある」
自由度の高さ (9)		「クライアントに合ったおもちゃの設置ができる」 「部屋の設定の自由度が高い」
雰囲気 (7)		「他のプレイルームに比べて幼すぎない」 「遊びを強制せず、落ち着く空間として機能」
その他 (2)		「知的に低い子に対する扱いをしていないことを示せる」

注) 括弧内は度数。

Table 7 部屋タイプと利点（メリット）のクロス集計

	部屋の大きさ		玩具・設備		自由度の高さ	雰囲気	その他	合計
	狭い	広い	その部屋特有の設備	距離感の調整				
玩具非常設PR (A)	0 (0.0)	1 (6.7)	<u>3</u> (20.0)	2 (13.3)	<u>7</u> (46.7)	2 (13.3)	0 (0.0)	15
玩具常設PR大 (B)	0 (0.0)	<u>4</u> (80.0)	<u>1</u> (20.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	5
玩具常設PR小 (C)	<u>4</u> (28.6)	0 (0.0)	<u>8</u> (57.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (14.3)	0 (0.0)	14
玩具有面接室 (D,E)	0 (0.0)	0 (0.0)	<u>5</u> (45.5)	<u>3</u> (27.3)	2 (18.2)	0 (0.0)	1 (9.1)	11
玩具無面接室 (F,G,H)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	<u>1</u> (20.0)	0 (0.0)	<u>3</u> (60.0)	<u>1</u> (20.0)	5
合計	4 (8.0)	5 (10.0)	17 (34.0)	6 (12.0)	9 (18.0)	7 (14.0)	2 (4.0)	50

注) 括弧内は各部屋におけるカテゴリの割合(%)。

部屋Iの使用はみられなかった。

太字と下線は、各部屋タイプの上位2つのカテゴリであることを示す。

Table 8 部屋の限界点（デメリット）のカテゴリ

大カテゴリ	小カテゴリ	具体例
部屋の大きさ(13)	狭い (9)	「やや圧迫感がある」 「戦いごっこをするのには狭い」
	広い (4)	「空間が広くてそれを活かすのが大変」 「やや広すぎる」
玩具・設備(15)	常設家具の汎用性低さ (4)	「ゲームをするには机が低い、椅子が遠い。椅子の距離を近づけてゲームしている」
	片づけの大変さ (6)	「片付けが大変」 「部屋の転換や、現場復帰に時間がかかる」
	設備の不足 (5)	「砂場がないので、持ち込んで使っている」 「基本的に他のプレイルームより物が少ない」
	取扱方法への留意 (3)	「物が多くてこけそう」 「トランポリンや水場などに上ったため、落ちそうになった」
自由度の高さ(7)	準備の難しさ (3)	「プレイ前に何を出したらいいかわからなかった」 「何を配置するか迷う」
	枠組み作りの難しさ (4)	「広くて空間が大きすぎることは、本人のにとって何をすればいいかわからない気持ちを喚起させた」
特になし (16)		「特にない」
その他 (2)		「使用した部屋に限ったことではないが、廊下の音がよく聞こえた（感覚過敏気味の子もだったので）」
注）括弧内は度数。		

Table 9 部屋タイプと限界点（デメリット）のクロス集計

	部屋の大きさ		玩具・設備				自由度の高さ		特になし	その他	合計
	狭い	広い	常設家具の汎用性の低さ	片づけの 大変さ	設備の不足	取扱方法への留意	準備の 大変さ	枠組み作りの 難しさ			
玩具非常設PR (A)	0 (0.0)	3 (25.0)	0 (0.0)	<u>5</u> (25.0)	2 (10.0)	0 (0.0)	3 (15.0)	<u>4</u> (20.0)	2 (10.0)	1 (5.0)	20
玩具常設PR 大 (B)	0 (0.0)	0 (20.0)	0 (0.0)	1 (20.0)	0 (0.0)	<u>2</u> (40.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	<u>2</u> (40.0)	0 (0.0)	5
玩具常設PR 小 (C)	<u>6</u> (42.9)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (7.1)	1 (7.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	<u>5</u> (35.7)	1 (7.1)	14
玩具有面接室 (D,E)	0 (0.0)	1 (0.0)	<u>3</u> (27.3)	0 (0.0)	1 (9.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	<u>6</u> (54.5)	0 (0.0)	11
玩具無面接室 (F,G,H)	<u>3</u> (50.0)	0 (0.0)	<u>1</u> (16.7)	0 (0.0)	<u>1</u> (16.7)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	<u>1</u> (16.7)	0 (0.0)	6
合計	9 (16.1)	4 (7.1)	4 (7.1)	6 (10.7)	5 (8.9)	3 (5.4)	3 (5.4)	4 (7.1)	16 (28.6)	2 (3.6)	56

注）括弧内は各部屋におけるカテゴリの割合(%)。

部屋Iの使用はみられなかった。

太字と下線は、各部屋タイプの上位2つのカテゴリであることを示す。

常設PR小（部屋C）の利点には、「玩具・設備」のうちの「その部屋特有の設備」、次に「部屋の大きさ」のうちの「狭い」ことが主にあげられた。

さらに面接室に関して、玩具有面接室（部屋D・E）の利点には「おもちゃ・設備」のうちの「その部屋特有の設備」、「距離感の調整」が主にあげられた。玩具無面接室（部屋F・G・H）の利点には、「雰囲気」が主にあげられた。

各部屋の限界点（デメリット） 新規ケースと部屋変更ケースにおいて、各部屋を利用してセラピストが感じた限界点（デメリット）の記述は56件であった。これらの記述を、臨床心理学を専攻とする3名の大学院生がKJ法に準じた方法で分析を行ったところ、5つの大カテ

ゴリと8つの小カテゴリが見出された。得られたカテゴリとその度数、記述の具体例をTable 8に示した。

次に、部屋タイプごとの限界点について検討を行った。上述した5つの部屋タイプと、限界点のカテゴリのクロス集計表をTable 9に示した。部屋のタイプごとに限界点をみていくと、玩具非常設PR（部屋A）の限界点には、「片づけの大変さ」や「枠組み作りの難しさ」といった「自由度の高さ」に関する内容が主にあげられた。玩具常設PR大（部屋B）の限界点には、「取扱方法への留意」や「片付けの大変さ」といった「玩具・設備」に関する内容があげられた。玩具常設PR小（部屋C）の限界点には、「狭い」といった「部屋の大きさ」に関する内容が主にあげられた。

さらに面接室に関して、玩具有面接室（部屋D・E）の限界点には「特になし」に次いで、「常設家具の汎用性の低さ」を主とする「玩具・設備」に関する内容があげられた。玩具無面接室（部屋F・G・H）の限界点には、「狭い」といった「部屋の大きさ」が主にあげられた。

考察

新規ケースにおける各部屋の使用状況

本研究の結果より、調査対象期間内に行われた18歳未満の新規ケースの部屋の利用件数は年齢層ごとに偏りがみられた。具体的には、部屋B（玩具常設PR大）は1-6歳のクライアントに対して、部屋C（玩具常設PR小）は7-12歳のクライアントに対して多く使用されていた。また、部屋A（玩具非常設PR）は7-12歳と13-17歳のクライアントに対して、面接室である部屋D、E、F、Gは、13-17歳のクライアントに対してのみ使用されていた。ここから、セラピストはクライアントの年齢を考慮して使用する部屋を選択している可能性がうかがわれる。ただし、本研究で扱ったデータは、新たなプレイルーム増設後の1年間に限定されるものであり、それ以前から継続しているケースはデータに含まれていないなどの限界点がある。今後は幅広くデータを収集し、クライアントの属性と部屋の関連についてより詳細に検討する必要があるだろう。

部屋を選択した経緯と視点

本研究の結果、調査対象期間における18歳未満の新規ケース45件のうち、その6割を占める27件は「セラピストの選択」によって部屋が決定されていた。一方、クライアントの希望により部屋が決定されたケースは、わずか1件のみであった。この結果から、本研究の対象である相談室で実施される子どもの心理療法では、多くはあらかじめセラピストが部屋を選択した上で面接が導入されている実状がうかがわれた。

次に、セラピストが部屋を選択した場合の選択理由についての結果を整理する。本研究の結果から、セラピストは、「おもちゃ・設備」、「部屋の大きさ」、「自由度の高さ」といった観点から部屋を選択していることが示唆された。佐々木（2014）は、プレイルームの構成を考える視点として、遊具や設備、部屋の大きさについて言及している。本研究において、セラピストが部屋を選択する際に「玩具・設備」、「部屋の大きさ」に着目していたことは、佐々木（2014）の取り上げた視点と整合する。

また、「自由度の高さ」に着目して選択していることに関しては、「言語面かプレイか悩みどちらでも利用可

能であったため」という回答にみられるように、初回面接時にはどういった心理療法の枠組みがクライアントに適切であるかが分からないこともあるため、部屋を選択する際には、プレイセラピーと言語面接のどちらでも対応可能になるように、セラピストが配慮していることが明らかになった。加えて、「言語面接の枠組みの中でゲームや箱庭も選択できる」といった回答にみられるように、プレイセラピーと言語面接を明確に区別せず、どちらの要素も面接で取り入れる可能性をセラピストが考えていることがうかがわれる。以上のことから、プレイセラピーと言語面接のどちらとしても使用可能である部屋を用意することは、子どもの心理療法を行う上で一定の意義があると考えられる。

なお、本研究の結果からは、上述の通り、「おもちゃ・設備」、「部屋の大きさ」、「自由度の高さ」等の観点を中心にセラピストが自ら考えて部屋を選択していることが示されたが、今後はクライアントの希望によって部屋を選択する場合の検討も必要であろう。面接に至る前にセラピストが行う「面接室の設定」も、面接構造の構築に関わるプロセスの一つである（保坂, 2001）ことをふまえると、部屋の選択というプロセスにクライアントが参加することが、その後の面接経過やクライアントの主体性の保証に影響する可能性も推測される。本研究では、クライアントに部屋の希望を尋ねたケースは1件のみであり、詳細な検討をすることができなかったが、今後はクライアントが部屋の選択に参与する場合の治療の意味や限界についても検討していく必要があるだろう。

各部屋の利点と限界点

本研究の結果より、部屋のタイプごとに利点と限界点が異なることが示唆された。中でも、玩具常設PRである部屋BとCに着目すると、部屋Bは、「広い」こと、部屋Cは「狭い」とことといった「部屋の大きさ」が利点としてあげられた。実際に、部屋Bは最も広いプレイルームであり、反対に部屋Cは最も狭いプレイルームであることから、部屋の大きさという物理的な特徴自体が、その部屋を使用する上での利点として反映されていると考えられる。後藤（2014）は子どもの心理療法における自身の体験を振り返る中で、広い部屋は身体リズムや適度な距離をとれること、狭い部屋は子どもとの距離が近くなって表現的な遊びが多くなることを取り上げ、クライアントによって大小の部屋を使い分けていたことを述べている。本研究の結果からも、部屋の大きさの特徴が、子どもの心理療法のプロセスに対して肯定的に作用している可能性が示唆された。

次に、玩具非常設PRである部屋Aの利点には、「自由

度の高さ」があげられた。部屋Aは鍵付きの収納棚に玩具が設置され、各ケースに応じて部屋のレイアウトや玩具の設置を変更しやすい構造をもっている。こうした自由度の高い部屋の特徴が利点として認識されていることから、比較的構造化されていない「自由度の高さ」をもつ部屋に一定のニーズがあることがうかがわれる。また、このような「自由度の高さ」は、セラピストだけではなく、クライアントの主体性が発揮されやすい可能性も考えられる。例えば、あらかじめ多くの遊具が固定されている部屋は、その部屋自体がクライアントに「遊ぶこと」を求めるメッセージを発しているとも捉えられる。同様に、遊び道具が全くない部屋であれば、自ずと遊びではなく、言語面接を求めるメッセージが伝わるかもしれない。これらをふまえると、自由度の高い部屋の構造は、遊びを主として面接を行うのか、それとも言語を主とした面接を行うのかを、クライアント自身が主体的に選択することも可能にすると考えられる。

面接室に関して、玩具がある面接室である部屋DとEでは、「おもちゃ・設備」として「その部屋特有の設備」や「距離感の調整」が利点としてあげられた。ここから、面接室としての構造をもちながらも状況に応じて使用できる玩具が用意されていることや、クライアントとの距離を机や椅子によって物理的に調整できることが、面接において肯定的に作用していることが示唆される。

一方、本研究の結果からは、各部屋の利点とされる事柄が、反対に限界点としても認識されうることが示唆された。具体的には、部屋Cでは「狭い」ことが利点としても、限界点としてもあげられていた。同様に、部屋Aでは「自由度の高さ」が利点である反面、「枠組み作りの難しさ」「準備の難しさ」といった「自由度の高さ」に含まれる内容が限界点としてあげられていた。これらの結果から、各部屋の特徴は、そのケースやクライアント、さらにはケースの展開や状況によって、利点にも限界点にもなりうると考えられる。石川他（2015）は、「枠組みがはっきりしている・していない」という空間と遊具の自由度の高低と、「クライアントが自由に動ける・動けない」というクライアントの自由度の高低の2軸から、プレイルームという治療環境の構成要素を自由が保障される機能」「自由にして守られた空間の機能」「準拠枠により安心感を得る機能」「身体感覚としての守りの機能」の4つに分類している（Figure 7）。しかし、これらは固定的なものではなく、クライアントの主訴や病態像、さらには治療時期やセラピストとの関係性といった様々な要因によって、空間と遊具の意味が変化する可能性を指摘している。つまり、同様の物理的環境であったとしても、セラピーの経過に応じて、その環境がク

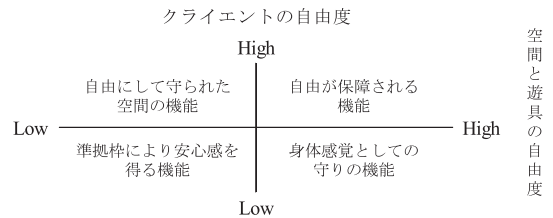


Figure 7. 治療環境の構成要素（石川他, 2015をもとに作成）

クライアントやセラピー自体に与える影響は異なってくると推測される。したがって、最初に部屋が選択される段階のみならず、セラピストは部屋の構造や設備、玩具などのアイテムの特徴を把握した上で、ケースの展開の中でも継続的に物理的環境への配慮と工夫をしていく姿勢が求められるといえよう。

今後の展望

本研究では、公認心理師および臨床心理士の養成のための実習機関でもある大学院附属相談室における18歳未満のクライアントを対象としたケースに着目し、各部屋の使用状況の実態や、セラピストが感じる利点と限界点について検討を行った。これまで、子どもの心理療法における物理的環境について、セラピストの視点からまとめた報告は見当たらないことから、本研究の結果は、心理療法における物理的環境を考える上での一資料となりうるだろう。ただし、本研究の結果は、特定の相談室1つのみを対象としていること、公認心理師および臨床心理士の養成課程に所属する大学院生を対象としていること、新たなプレイルームを増設後1年間の新規ケースと部屋の変更があったケースに限定されていることなど、収集したデータに様々な限界がある。今後は、経験年数の異なるセラピストや、多様なケースを対象にしたリ、実際のクライアントが物理的環境をどのように捉えているかを掘ったりして、より詳細に検討していくことが必要だろう。加えて、各部屋の構造に着目した事例研究も行っていくことで、心理療法における物理的環境に関する幅広い知見を蓄積し、実際の臨床場面に活かしていくことが必要と考えられる。

引用文献

- Axline, V. M. (1947). *Play therapy*. Boston: Houghton Mifflin. (V. M. アクスライン, 小林 治夫 (訳) (1972). 遊戯療法 岩崎学術出版社)
- 後藤 秀爾 (2014). プレイルームという可能性空間—部屋と遊具とセラピストとそれを抱える環境と—

- 名古屋大学発達支援精神科学教育研究センター心理発達相談室紀要, 29, 19-27.
- 平木 典子 (1997). カウンセリングとは何か 朝日新聞社
- 保坂 亨 (2001). 面接構造を作る 平木典子・褔岩秀章 (編) カウンセリングの技法—臨床の知を身につける— (pp.16-38)
- 石川 佳奈・丸山 宏樹・山下 沙織・垣内 圭子・小林 佐知子・永田 雅子・松本 真理子・森田 美弥子 (2015). 大学附属相談室プレイルームの物理的環境に関する研究—空間と構成要素のもつ機能—名古屋大学発達支援精神科学教育研究センター心理発達相談室紀要, 30, 35-46.
- 神田橋 條二 (1984). 精神科診断面接のコツ 岩崎学術出版社
- 小林 佐知子・永田 雅子・松本 真理子・小松 尚. (2012). 心理面接室の改修に伴う面接者の空間イメージの変化と物理的要因の意味について 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要. 心理発達科学, 59, 71-77.
- Landreth, G. L. (2002). *Play therapy: The art of the relationship* (2nd Ed.). London: Brunner-Routledge. (ゲリー・L・ランドレス, 山中 康裕 (監訳) (2007). プレイセラピー—関係性の営み— 日本評論社)
- 前田 重治 (1981). 心理臨床—精神科臨床と心理臨床 家 星和書店 (pp.144-146)
- 丸山 宏樹・永田 雅子 (2014). 大学附属相談室の物理的環境 名古屋大学発達心理精神科学研究センター心理発達相談室紀要, 29, 45-50.
- 三輪 佳子・羽生 和紀・飯長 喜一郎 (2006). 心理相談室の使われ方の類型化: 家具調査法を用いた検討 人間・環境学会誌, 9, 11-20.
- 森田 美弥子・佐々木 美恵・坪井 裕子 (2004). 相談室の移転が相談活動に及ぼした影響—物理的環境の心理的意味を考える— 名古屋大学発達支援精神科学教育研究センター紀要, 19, 3-13.
- 佐々木 美恵 (2014). セラピストを中核として息づくプレイルームという空間 名古屋大学発達支援精神科学教育研究センター心理発達相談室紀要, 29, 29-35.
- 白川 真裕・津川 律子・羽生 和紀 (2016). 心理面接室環境の実態に関する研究—臨床心理士を対象とした予備的検討— 環境心理学研究, 4, 29-29.
- 田畑 治 (2010). 臨床心理面接の場のイメージ—臨床心理士養成大学院生の描画を通して— 愛知学院大学論叢, 6, 29-43
- Winnicott, D. W. (1971) / *Playing and Reality*. Tavistock Publication (橋本雅雄 (訳) (1979). 遊ぶことと現実. 岩崎学術出版社)

ABSTRACT

Choosing the physical environment in child psychotherapy
– A study on the actual condition of the counseling room of the graduate school –

Makiko SAKAI, Kana YOKOYAMA, Shoko YOSHIDA, Shihori IDE and Masako NAGATA

The physical environment in which psychotherapy takes place influence the process and effectiveness of the therapy. Particularly in children's psychotherapy, various environmental factors such as room size, furnishings, and toys may be relevant to the therapy, and the therapist may need to arrange the physical environment with taking these factors into account. However, there are only a few studies that have examined the physical environment of psychotherapy for children. In this study, we focus on the cases of child clients under 18 years of age in a counseling room at a graduate school for clinical psychologists and certified public psychologist, and examine the actual use of each room, the choice of rooms, and the advantages and limitations of the rooms as perceived by the therapists.

A questionnaire survey was administered to graduate students who had undergone training to become a clinical psychologist and certified public psychologist at an affiliated counseling room of the graduate school; 36 students responded. This study included cases of clients under 18 years of age who had an intake interview (new cases) or a change of room (change of room cases) during the first year after the new playroom was constructed. For these cases, we asked the therapists about the demographics of the therapist (gender, grade level), the demographics of the client (gender, age, chief complaint), how and why the room was chosen, and the perceived advantages and limitations of using the room.

Of the responses, 45 were new cases and 5 were room change cases. In 27 of the 45 new cases, the room was selected by the therapist. Our categorization of the open-ended statements about the reasons for the therapists' choice of room resulted in the following categories: "toys and equipment", "room flexibility" and "room size". The results of categorizing the open-ended statements about the advantages and limitations of using the room showed that the advantages and disadvantages differed from room to room. In addition, these results suggested that what is considered to be the advantage of each room can be perceived as a limitation as well. The characteristics of each therapy room can be either an advantage or a limitation, depending on the case and the client. Therefore, it is necessary for the therapist to consider the characteristics of each room and to devise a physical environment that is appropriate for each client and case.

Key words: child psychotherapy, physical environment, playroom, counseling room